

聖書：マタイ 27：52～66

説教題：この方は本当に神の子

日時：2020年10月4日（朝拝）

前回、イエス様の十字架上の死の場面を見ました。そしてその死に伴って起こった不思議なことを3つ、マタイは書き留めていると申し上げて、その一つ目までを見ました。その一つ目のこととは51節の「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」ことでした。これは神殿の一番奥の部屋、神の臨在の象徴とされる至聖所と呼ばれる部屋と、その前の部屋とを仕切る幕のことと思われます。その死聖所には大祭司が年に一度、いけにえの血を携えて入ることができるだけでした。これは聖なる神と罪人である私たちとの間にある距離感を指し示すものでした。しかし今やキリストの十字架の死を通して、神との交わりを妨げていた罪の問題が解決されました。そこでキリストに信頼する者は大胆に聖なる神、父なる神に近づくことができます。神はこの隔ての幕を取り除いて、キリストに信頼する者を誰でも受け入れてくださる。そういうメッセージを語るものでした。

では二つ目の不思議なことは何でしょうか。それは52～53節にある通り、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返ったこと、そしてその人々が墓から出て来て、聖なる都エルサレムに入り、多くの人に現れたことです。これは読む私たちみなを当惑させる記事ではないでしょうか。この記事はここにしか出て来ませんので多くの人には馴染みがないかもしれません。そしてあまりにも不思議な内容のために、本当に、現実に、こんなことが起こったのだろうかと思いが混乱して来ると思います。イエス様が死人を生き返らせた記事は福音書の中に何度か出て来ます。会堂司ヤイロの娘を生き返らせたこと、また墓の中に入っていたラザロを生き返らせたこと。私たちはそれらは何とか受け止めることができます。しかしここで起こったことは異常過ぎます。生き返ったのは多くの人です。しかもその人々が墓から出て来てエルサレムの町で多くの人に現れた。こんなことが起こったらエルサレムは大混乱に陥ったのではないかと。本当にこんなことが起こったのだろうか、と私たちはまごついてしまうわけです。しかし先に申し上げれば、これは私たちにとって神秘的な出来事と言うより他ありません。これ以上の情報がないので、ここに書いてある以上のことを私たちは知ることができないのです。私たちが知りたいと思う多くの疑問に対する答えは見つからないのです。

53 節を見ると、生き返った人が墓から出て来たのはイエス様の復活の後でした。ですからイエス様が十字架にかかった金曜日ではなく、日曜日以降です。ではどうなるでしょう。52 節に書いてあることは、イエス様の十字架の死直後に起こったとすれば、聖なる人々は金曜日に生き返り、日曜日まで墓の中にとどまっていたのでしょうか。それも考えにくいことです。ある人は金曜日に起こったことは、51 節後半の「地が揺れ動き、岩が裂け」と、これと連動した 52 節最初の「墓が開いて」までだった。そして日曜日に多くの人々のからだが生き返り、墓から出てエルサレムで人々に現れたのだとします。そうだとすると、まだ何とか理解することができます。いずれにしても、ここで言われていることは私たちの日常の経験から論じられるようなことではありません。これはこの時限り起こった特殊な出来事です。そしてそれゆえに独特のメッセージを私たちに語っているものです。

そのメッセージとは何でしょうか。一つ目の不思議な出来事、すなわち神殿の幕が上から下まで裂けた出来事が示すメッセージは、神と罪人との交わりを妨げていた罪の問題が今やイエス・キリストによって取り除かれたということでした。とするなら、その結果として、この二つ目のことが起こってもおかしくないことになります。すなわちこれまで人間を墓の中に閉じ込めていた死の力が今や無力なものとされたということです。実にイエス様の十字架上の死が成し遂げたことはそのことであるとヘブル人への手紙 2 章 14 節に言われています。そこにイエス様はご自分の死によって、死の力を滅ぼしたと言われています。私たちが味わうべき死の呪いをイエス様が身代わりに全部引き受けてくださったので、もはや死は信じる者たちの上に力を持つことができない。そこで墓が開いたのです。そしてイエス様の復活に合わせて、ある人々のからだが生き返り、エルサレムの人々に現れるという異常な出来事が起こったものと思われま。これはイエス様の十字架および復活が何を意味するのか、どんな力を持っているのか、人々に示すための一種のデモンストレーションのようなものと言えます。死の力は今や打ち破られた！私たちの人生は墓で終わりとなるのではない！それに勝るいのちの世界が現れた！ということを強力に人々に語るものだったのでしょう。

3 つ目にマタイが記していることは、54 節の百人隊長をはじめとする人々の「この方は本当に神の子であった」という告白です。彼らはずっとイエス様を見張っていました。36 節で「イエスを見張っていた」と言われていた人々と同じでしょう。彼らは先にはイエス様をからかいました。その後であらゆる人々からののしられ、嘲られた姿を見て来

ました。また全地が真っ暗になったこと、その中でイエス様が人々に言い返したり、恨みつらみを述べることなく、ただ父なる神に叫び、会話していたこと。そして最後に大きな信頼を平安をもって息を引き取ったこと。またその後起こった地震やいろいろなことを見た時に、圧倒されずにいなかったのです。そして思ったのです。これは決して普通の人の死ではない。ましてや犯罪人の死などではない。この方は本当に神の子であった！ 非常な恐れをもって、そう言うより他なかったのです。

ここにある大いなる皮肉は、ユダヤ人はイエス様に向かって、お前が神の子なら、そこから降りてみよ！ と、それを信じない立場からさんざん嘲ったことです（40 節、43 節）。そんな中、異邦人である百人隊長や一緒に見張っていた者たちが、この方は「神の子」だと告白しました。しかも「本当に神の子」と強い確信をもって語りました。もちろん彼らはすべてが分かったわけではないと思います。しかしこの死は特別な方の死だということは分かった。神の子の死だと言わずにいられなかった。非常な恐れとともに、そう告白せずにいられなかったのです。これこそ、十字架上のイエス様に対して私たちが持つべき視点だということをマタイは示しているのではないのでしょうか。彼らは異邦人でしたが、見る目を持つ人にはきちんと見えたのです。私たちがこの彼らの告白の言葉の光の下で、この場면을正しく見るように！ とマタイは促しているように思われます。

さてこのイエス様の十字架の場面には、イエス様を信じ、イエス様の側に付く人々もいたことが続いて記されます。まず 55～56 節には女たちのことが書かれています。彼女たちはガリラヤからイエス様について来て仕えていた人々でした。彼女たちについて、ルカの福音書 8 章 1～3 節にこのように記されていました。「その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」 そしてこの場面にいた人々の名前が 56 節に具体的にいくつか記されています。ここを読んで私たちが思わずにいられないのは、男たちはどうした？ ということではないのでしょうか。使徒たちをはじめ男たちは、ヨハネを除いてみんな逃げてしまっていました。そんな中、女たちは主のもとにとどまっていました。55 節に「遠くから見ていた」とありますが、これは女たちとして、それ以上近付くことができなかったということでしょう。彼女た

ちはとどまることができる場所でイエス様の十字架の死を見届けました。そしてこの後の葬りの場面でも、そこにいました。さらに次回見る三日後の日曜日にもイエス様のからだの世話をするために墓へ向かいます。これは決して簡単なことではなかったと思います。世の中みながイエス様を十字架につける！と言ったのです。周りの人々みながイエス様を犯罪人扱いし、見捨てました。そのイエス様の側に私たちは付くという態度を彼女たちは示したのです。この彼女たちは、この後、大きく報われます。この彼女たちが復活の最初の証人となります。イエス様はよみがえったという喜ばしい知らせの第一報を全世界に向かって最初に伝える栄えある人たちとなります。そのように彼女たちは用いられ、祝されます。

もう一人は 57 節から出て来るアリマタヤのヨセフです。彼の名はこの福音書ではここで初めて出て来ます。彼について参考になるのは、ヨハネの福音書 19 章 38 節で「イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していたアリマタヤのヨセフが」と記されていることです。またマルコの福音書 15 章 43 節に「このヨセフは有力な議員で」とあります。彼はユダヤの最高議会サンヘドリンのメンバーで、そのこともあってか、これまで自分が主を信じる者であることを隠していました。いわば隠れキリシタンでした。その彼が今参照したマルコ 15 章 43 節に「勇気を出してピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願い出た」とあります。弟子たちがみな恐れをなして舞台から消え去った中、このヨセフが俄然勇気を奮って一人、舞台の真ん中へと出て来たのです。彼をこのように動かした力は何だったのでしょうか。それはやはりイエス様の十字架の死の姿だったに違いありません。彼はそのイエス様の姿を見ていたでしょう。その時、彼はこれまで通り、主の弟子であることを隠し続けることはできないと考えました。ここで自分を現さなければウソになる。そうして思い切ってピラトのところへ行き、イエス様のからだの下げ渡しを願ったのです。そうすることは、私はイエスの弟子です！と公にすることです。これによって彼はサンヘドリンのメンバーから見下され、名誉を失うかもしれません。失職するかもしれません。しかし彼は十字架上で恥辱の状態にあるイエス様を放っておくことはできないと考えました。自分は自分にできる精一杯のことを今しなければならぬ！と。そうして彼はおそらく自分用にと作っていた新しい墓にイエス様を納めました。そこには先の女たちもいたこと、またヨハネの福音書の平行記事からは、やはり人目を避けて夜にイエス様のところに来た同じく議員の一人ニコデモも香料をもってやって来たことが記されています。この出来事はこれで終わりません。イエス様はこのアリマタヤのヨセフの墓から復活することになります。彼の墓はよみが

えりのいのちが始まる場所となります。そのように彼がしたことは大きく用いられ、彼のイエス様への献身は大きく報われることになるのです。

最後 62～66 節には祭司長たちの対策のことが記されています。彼らは翌日の土曜日になって心配になりました。イエスはかつて三日後によみがえると言っていた。その言葉を受けて、弟子たちが遺体を盗み、イエスはよみがえったと主張するかもしれないと。ここにある皮肉は、弟子たちはイエス様の復活について全く考えてもいなかったのに、敵の方が覚えていたということです。もちろん祭司長たちはそれが起こると考えていたわけではありませんが、弟子たちが先に述べたような行動を取ることを懸念して、先回りして阻止しようとしたのです。そこでピラトにローマ兵による最高の警備を願い出ます。そして番兵が遣わされ、墓石に封印がされます。封印の前には中身も確認されたでしょう。しかしこうした対策は全部引っ繰り返されることとなります。せっかくここまでのことをしたのに、彼らの思い通りになりません。石に封印したのに、イエス様は何のその復活してしまわれます。ここには読む者にある種の笑いを与える要素があります。詩篇 2 篇 4 節:「天の御座に着いておられる方は笑い、主はその者どもを嘲られる。」人間のどんな計画や企みも、神の全能の知恵と力に逆らうことはできない。神に逆らう試みについて天の御座に着いている方は笑う。それらはすべて無に帰される。その神のみわざが次の 28 章に記されることとなります。

以上の箇所を通して、私たちはイエス様の十字架をどのように見るべきか、正しい視点を与えられたいと思います。特に百人隊長らが非常に恐れながら語った「この方は本当に神の子であった」という言葉を良く思い巡らしたい。その時、続いて記された女たちやヨセフの献身的行為をより良く理解することができると思います。すべての人がイエス様を拒絶し、捨て去った中、あの女たちやヨセフのように行動することは大変危険なことであり、また多くの犠牲を払うことだったと思います。しかし彼らは、そうせずにはいらませんでした。それは十字架の出来事を正しい光の下に見たからでしょう。すべてが分かったわけではなくても、確かにイエス様はその全生涯をかけて私たちを愛してくださいました。私たちのためにとてつもなく大きな犠牲を払ってご自身をささげてくださいました。そのお姿を見た時に、彼らは応答せずにはいらなかったのです。つまり彼らのこのようなイエス様への献身は何よりもイエス様の献身を前提にしているものであり、またイエス様の献身を反映するものです。神の子である方がご自身の尊い命までもささげて愛してくださいましたことに対する応答の愛の行動だったということです。

私たちもこの百人隊長の言葉に導かれ、改めてこのイエス様の十字架の場面を正しい目で見える者へ導かれたいと思います。「この方は本当に神の子であった」と彼らは恐れながら言いました。その神の子である方が私たちを罪から救い出すため、贖いの代価として、ご自分の無限に尊い命を身代わりにささげてくださいました。そしてその死によって、私たちに墓で終わりとはならないいのちの世界を開いてくださいました。そのことを見て「私たちは」どのような応答をささげるでしょうか。この女たちやヨセフのしたことが、このように書き留められているということは、いかに神が彼らのこの愛の応答を尊く心に留めておられるかの現れと言えます。同じように私たちが愛によって応答の歩みをささげる時、神はそれを尊び、喜んで受け止めてくださいます。そして神は女たちを復活の証人として用いることにより、またヨセフの墓を復活の最初の墓とすることにより、彼らの愛に豊かに報い、ご栄光のために用いてくださいました。私たちもこの驚くべき神の御子の愛のみわざに導かれて、私たちそれぞれの愛の応答をささげる者へ導かれたいと思います。そしてそのことを神に覚えられ、喜ばれて、さらにその私たちの愛の応答が神の栄光のために用いられる幸いへと導かれて行きたいと思います。